

『強いセーリングチームを目指して』

アテネオリンピックキャンペーンから学ぶ

北京オリンピック特別委員会

マネジメント委員会

アンケート最終報告書

1. アンケート実施と目的

2004年10月18日（月）アテネ五輪キャンペーン反省会（江ノ島）を実施してから1年が経過しましたが、アテネ五輪キャンペーンを実施した中で連盟（以下 JSAF と称す）の問題点、選手および指導者の立場で発生した各諸問題、各チームが抱える緒問題等を提起してもらうことで、北京五輪に向け改善策を見出す目的で、本アンケートを実施しました。

アンケートは、被験者（選手/コーチ）の意見、考え方を観察傾聴し共感的な繰返しを行うことによるミラーリング（発言したいことを整理し、隠れた気持ちや要求に気づける効果）や共感効果を得ることができる資料です。

1年前に実施したアテネ五輪キャンペーンのアンケートから問題点を検討し、再度同じ状況を造らないことで、JSAF と今後のキャンペーンを実施する選手/コーチ等々の葛藤イメージのフラッシュバックを防ぐことを目的としています。

以上のことからアンケートでの各意見をまとめ各課題を整理した中で、2008年北京五輪キャンペーンに向け、新しい組織体制の中で委員会制度を導入し、役割分担を明確することとしました。

（1）組織体制

<強化統括委員会>

強化統括委員会委員長はオリ特委員長が兼務、委員会構成は管下3委員会の委員長・副委員長とし、下記の強化事業全体の計画立案を行います

- 1) オリンピック代表選手の JSAF 理事会への推薦
- 2) 五輪キャンペーン全体事業計画の企画立案
 - *強化重点施策 *スケジュール *海外遠征 *強化合宿
 - *チーム、コーチ招聘 *NT 基準・選考 等
- 3) 北京五輪までの中長期予算計画の立案
- 4) JSAF ゴールドプランの企画/実行/推進施策の立案
 - 「競技力向上委員会」との連携
- 5) 北京五輪会場地（青島）の現地調査チームの設立

*気象

*ベースキャンプ地/宿舎

*ショップ・ボートヤード等

- 6) 選手の技術習得評価方法・基準の作成
- 7) JOC方針に合わせた調整、JSAF 方針の検討
- 8) JISS（国立スポーツ科学センター）との連携
- 9) オリンピック強化アドバイザーとの窓口

<マネジメント委員会>

- 1) オリンピック特別会計の事業予算 策定および実績の管理/修正
- 2) JOC、スポーツ振興基金、toto 等の情報収集 補助金の折衝、申請、予算運用管理および事業報告書の作成
- 3) 海外遠征、国内合宿、ナショナルチーム選手、強化対象選手のデーター管理 等、
- 4) 強化事業全体マネジメント
 - *計画 *経費 *物流 *移動手段 *その他
- 5) 海外遠征における危機管理
- 6) 海外、国内情報の収集と提供
- 7) メディア対応と広報活動 インターネット／ H. P での告知、広報管理

<強化事業委員会>

- 1) 各コーチとの情報交換・連携・調整および意向確認
- 2) 強化合宿の実施
- 3) 海外選手・コーチ招聘事業、海外派遣事業の実施
- 4) ナショナルチーム選考レースの実施
- 5) 艇体、セール、ギア類のテストと評価（データー分析）

<指導・評価委員会>

- 1) オリンピック種目艇種別協会との情報交換・連携・調整および意向確認
- 2) 選手の技術習得評価（ステップアップの評価値）の実施
- 3) 年間トレーニング計画の策定 - 艇種別協会との調整
- 4) 海外遠征成績の分析
- 5) 選手の技術レベル向上を図るコーチングテクニックの向上
 - *他競技団体の方法論の情報収集
 - *海外コーチの指導方法の研究
 - *コーチ学文献の情報収集

（上記は、JSAFホームページ オリンピック特別委員会に記載）

2. アンケートの結果と考察

設問 1. 自チームのキャンペーンの進め方について

・キャンペーンの進め方の概略

各種目、各選手は、限られた環境化の中でキャンペーンの計画を立てているが、基本のベースになる項目は、

- ① 大会日程、遠征計画（国内/海外）
- ② 強化合宿計画
- ③ フィジカルトレーニング
- ④ 資金面との調整

上記4点を基本に年間計画、中長期計画を立てていることが考察できた。

上記以外では、選手の競技力のレベルアップを図ること以外でハード面（ボート、マスト、セール、フォイル）の研究開発にも主眼を置いた練習計画を遂行したチームもあった。

プライベートコーチを持つチームは、コーチが計画を立案し、プライベートコーチを持たない選手は、NTの選手達と協力して独自で練習会等などを自主的に実施し、競技力向上を図っていたことが考察できた。

また海外の選手やコーチとのネットワークを広く持つことで、積極的に彼らと合宿等を行なったチームもあった。

・良かった点を述べて下さい

世界選手権を含め海外遠征を通して海外の選手と競うことは、各選手にとって良い経験材料であり、海外を意識しなければレースでも良い結果は望めないと感じている。国内合宿では、他クラスの選手と交流があったことで友人関係はもとより、様々な経験談などが聞けた。

チームの体制、目標に対して逆算した考え方、目標設定、企業の組織力を持って優秀な成績を獲得できたチームもあった。

また各選手が自主的に海外遠征等を計画、実施したことで、マイペースにキャンペーンができた利点もあるが、逆を言えば各選手がバラバラの計画でナショナルチームとしてのまとまりにやや欠けていた批判もあった。

悪かった点述べて下さい

個人差はあるが、大きく別けて下記項目がキャンペーンでの悪かった点として抽出された。

- ① 資金力不足による計画の変更
- ② 練習時間の制限（社会人チーム）
- ③ JSAF強化部の組織力不足、連携不足について
 - ・ 強化部の具体的な強化方針、指導方針、マネジメントが理解できなかった
 - ・ JSAFとの
 - ・ シドニー後の計画が選手側にきっちり伝わっていなかった
 - ・ 選手の成長、あるべき姿が見えるものがなかった
 - ・ JSAFの方針に沿えば世界が見えてくるぞという気になれなかった
 - ・ レベルアップでない点の合宿だけに終わった
 - ・ 補助金のみの援助で、強化方法など一切の援助が無かった

- ・ 精神的サポートをしてくれる人間がいなかった
- ・ オリンピック本番よりも、以前の活動、準備、統制がとれていなかった
- ・ 選手の協調性の欠如・わがまま・個人主義
- ・ コーチが最低限のサポートが出来ていない(何が悪いのか理解できていない)
- ・ コンテナ内部の整備が出来ていない、準備不足、改善努力がない
- ・ 英語力の卓越した人がハーバー内にいなかった
- ・ 費用がオリンピックではあまり無かった様だ、何処に使ったのか？？？
- ・ コーチ(スタッフ)適材適所の配置が出来ていない
- ④ コーチと選手の関係(自己主張ができなかった)
- ⑤ 客観的な視点で自分達を評価できていなかった
- ⑥ 選考レースのタイミングは難しく、ピーク作りの失敗
- ⑦ コーチが固定できなかった
- ⑧ セーリングパートナーがいなかった
- ⑨ 多くの活動が個人もしくは選手のみで行なわれ、練習量・質とも偏りがあった

上記のことから、JSAFと選手/コーチ間の不調和があったことが理解できる。
今後組織体制の見直しは、北京五輪に向けた必須事項であると考ええる。

また組織体制以外での活動するための資金的不足は、企業がバックアップするチームと個人で活動するチームとで格差が大きく、全体的なNT活動に支障が出ていると考える。

今後、北京を目指す計画を持っていますか

2MAN クラスでは、乗員を変更し今後も継続して活動するチーム、その他の種目でも継続を検討中のチーム、種目を変更し挑戦するチーム、サポートに徹する選手等々1年前の時点では、4年後の自分を模索するチームが多かった。

設問2. キャンペーン費用について

・費用の捻出方法を差し支えない範囲で述べて下さい

金額を明記したチームは、1部を除いてなかった。

しかし基本的な捻出先は、各チームを総括すると企業、企業クラブの経費、自己資金、JSAF補助金、県連強化費、副収入費（講習会、その他）が挙げられる。

サプライヤーからの援助としてウエットスーツ、セーリングウエア、スポーツドリンク等の物品提供などもある。

・資金使途の主要なものと金額を差し支えない範囲で述べて下さい

選手としては、競技艇購入費、国内、海外遠征に伴う旅費交通費、セール等備品購入費、物流費等が大きな使途であった。

プライベートコーチを持つチームでは、コーチボート一式の購入費を含めた雑費（運搬、燃料、保険、修理等）が挙げられる。

またフィジカルトレーニングの施設利用、フィジカルアドバイザー、気象アドバイザー、オリンピック用の新艇等の資金使途を計画したチームもあった。

W/S 選手では、ハンドリングでの艇運搬費（オーバーチャージ）が必要なために、その資金を捻出することに苦労していることが考察できる。

＜具体的費用＞

●470 級

合宿費&レース遠征費用 年間約1～1.2千万円(競技艇、備品等は除く)

●ミストラル級

競技艇 200 万円以上 (4 年間) 遠征費 約 800 万円 (4 年間)

従って年間 200～250 万円が必要となる

アジア地域の遠征であれば 1 大会約 15～25 万円ぐらい

ヨーロッパ地域であれば、遠征費は約 30 万円ぐらい

*ただしハンドリングでの艇運搬費 (オーバーチャージ) が必要であり、今後の課題として W/S 級の運搬は、コンテナ利用を検討する必要がある。

●レーザー級

海外遠征費用 約 300 万円ぐらい

課題点・問題点を述べて下さい

個人で活動する選手にとって、多額の出費はできないことで活動は制限される傾向にある。
またコーチフィー、フィジカル面に掛かる費用まで捻出しきれない現状である。

それに伴い競技者として資金調達、運搬手段の確保、段取り等の手配に迫られ、満足した競技大会での本来の成果が出しづらい環境であったと考える。

また個人で活動する選手を含めJSAF補助金(JOC、他補助金)が補助される金額を含め毎年捻出できるか等の不安を持っていたと考察する。

今後は、補助金の透明性とJSAF強化方針に沿った納得できる有効な使途方法を、選手/コーチに対し明確にする必要がある。

JSAF の資金不足は、従来から言われていることであるが、選手がトレーニング、大会に集中できる環境整備を造る(運搬方法の確保、遠征の事前準備、現地の情報、現地滞在等の手配)ことは、資金をかけずにできることと考える。

設問3. ナショナルチームについて

(1) 選考レース方法

・選考レースの良かった点を述べて下さい

冬場の蒲郡でNT選考レースを実施したが、十分な期間を持ってレース数が多かったので結果に対して、多くの選手が納得できたと回答している。

また厳しい海上コンディションの中、体力、精神力など、総合的なタフネスが試された選考であり、過酷なレースでこそ得るものがあり、強い選手を選考できると評価する意見もあった。

またオリンピック最終選考の公示が早かったことの評価もあった。

・選考レースの悪かった点述べて下さい

冬場の蒲郡の地理的海象が非常に寒く強風シリーズとなったことで、猛暑のアテネ、軽風と言われた海面情報の中で、五輪本番につながるコンディションの会場を選ぶことも必要と考える。

また風のコンディションに合わせ、1年に1回の選考ではなく、複数回に分けるなどの考慮が、今後必要かと思われる。

他種目で選考レースを実施した場合、コース設定の距離、各選手の参加できる実施期間、環境

も考慮しなければならないと考える。

470級とレーザー級であれば、470 級に合わせて設定ではレーザー級では長すぎ、また選手の疲労・負担が大きいとも考えられる。

上記の理由から参加選手が限られる傾向となってしまう。

・今後の選考はどうあるべきか意見を述べて下さい

出場選手が納得できるレースであることは言うまでもないが、回答の中で開催時期、風域に関して下記のコメントが多かった。

- ① 夏の軽風から冬の強風まで幅広いコンディションをカバーし、オールラウンドな風が吹く場所での選考
- ② 国内選考では、オリンピック海面のコンディションを調査をしターゲットとなる風域のレース回数の比率を多くする方法
- ③ それぞれの風域で実際のオリンピックの海面にあった状況下での選考
- ④ 世界選手権等で代替する方法
- ⑤ オリンピックの最終選考となった世界選手権から、オリンピック本番までの時間が短すぎることでオリンピックイヤーは早い時期に選手を選考しその選手の強化に努める方法

大きく1年を通してNTチームの選手では、3月から海外遠征を始めるチームもあり、艇種別によって異なるが世界選手権大会等が終わり帰国するのが、9月ごろとなる。

9月～11月は、国体、種目別全日本大会が行われることから、12月～3月の時期に国内選考レースが実施されることとなる。

またNT強化合宿を含め各チームの個別トレーニングを加味すれば、タイトなスケジュール内で活動していることとなる。

JSAF強化の年間スケジュール、方針を早期に公示することで、各チームでの調整が可能となると考える。

選考方法、場所は、最終目標である五輪開催地の調査と適した風域での実施および選考方法の早期実施(案)を提示することが必要と考える。

また艇種の少ないクラスでは、選考レースを実施する必要性も含め、ある程度クラス協会および参加する選手の意見も取り入れ選考レースを行う必要があると考える。

(2) ナショナルチームの数について

・チーム数についての考えを述べて下さい

●470 男子

- ・現在の半分で、半分の選手に倍の援助をするのが理想である
- ・男子6チームは問題ないと思う
- ・男子については多いと思う

●470 女子

- ・女子は5チーム程度に増やしたほうが良い

・1年目は広く考えて現状の数で良いと思いますが、最終選考になるまでに数をしばっていくことがより厳しくなる道だと思います。最終的には女子も男子も3でよいと思う

●ミストラル級

- ・合宿でよい練習ができる程度の人数および強化費に見合う人数
- ・現状数は、多すぎる。またはチーム内でランクを分けることが必要
- ・JSAFのNT(ナショナルチーム)は男子4人女子2人
- ・クラス協会でその下の男子6人、女子4人を認定する
- ・強化合宿は上記男子10人女子6人で行い、JSAFからの資金援助はNT男子4人女子2人
- ・物品の援助、金銭的援助等の格差をつける
- ・男子2、女子2で充分

●レーザー級

- ・3艇という数は妥当
- ・2隻プラス1隻(プラス1は、若い有望選手)
- ・ナショナルチームの認定により活動環境が作りやすい選手がいることを考えれば現状維持
- ・ナショナルチーム内でも成績によりサポート内容の差別化をはかる

NT数に関しては、各選手の意見に違いがある。広く認定し少ない援助にするか？狭く認定し多く援助するか？に区分されるが、NT内のランク付けが必要であることが重要であるとする。

そのことで意見のあった「ナショナルチームに実質的存在意義」が明確になる。

また世界ランク50位以下のチームは、オリンピック最終選考を海外でやる場合の疑問等が意見としてあったが、数を行かせるのではなくレベルの高いチームのみで戦わせる方法も考えられる。その余剰金を、集中した強化に使えるとも言える。

(3) ナショナルチームとしての活動について

・ 良かった点を述べて下さい

- ・2/3の遠征費等(JOC 補助金)の援助金
- ・ヨーロッパ遠征時に車(トヨタ)のサポートを受けられたこと
- ・ウェア、その他の物品供与
- ・西が丘の国立トレーニングセンターの使用
- ・合宿等で集中した練習ができたことで全体的レベルや意識があがった
- ・職場に対し、ナショナルチームの認定により活動環境が作りやすい

上記のメリットがあったことで、活動の一助となった選手もある一方で、援助内容に関して不満を持つ選手もあった。これは上記ナショナルチームの数でも提示したが、「ナショナルチームに実質的存在意義」に疑問を持つチームがあったと考察する。

・ 悪かった点を述べて下さい

- ・ナショナルチームの定義がよくわからないこと

- ・ナショナルチームの存在意義が明確でないこと
- ・沖縄合宿以外、これといった合宿や練習がないこと
- ・ナショナルチームに入る意味をほとんど感じなかった
- ・選手を束ねられるリーダーシップをもったコーチがいなかったこと
- ・一緒になるのは合宿の時だけで、実質バラバラだったこと
- ・技術や考え方などほとんど共有できなかったこと
- ・ナショナルチーム全体をうまくまとめられる指揮者がクラス協会にいなかったこと
- ・各チームが立てた計画に対し、アドバイス(確固たる連盟の方針)がなさすぎる
- ・各チームの予算を把握し、サポートできる部分と出来ない部分を明確でなかったこと
- ・ルールが事前に徹底していないこと(全員に平等であるべき対応)

・今後のナショナルチームのあるべき姿の意見を述べて下さい

- ・日本チームとして士気を高め、みんなで団結し助けあいながら無駄を無くし活動していく
- ・海外での短期合宿も計画に盛り込む
- ・海外では日本チームはバラバラなことが多く、情報が共有できていない
- ・個人コーチもナショナルチームで働くときは全体を考えて効率よく選手が練習できるよう協力できればよい
- ・ナショナルチームとしてのメリットを充分享受できる体制づくり
- ・プロジェクトを創ることが望ましく、そこにはセーリング技術、フィジカル、メディカル、メンタルの専門的な研究アドバイザーが選手・専属コーチと相互に研究開発を行うことが出来る人間関係(スタッフ)の構築が必要
- ・他の成功している団体に強化が学ぶべき
- ・強烈に強いリーダーシップを持った人物がナショナルコーチになって、その人が中長期的にチーム全体をコントロールすべき
- ・海上でのマーク設定、トレーニングメニューの作成、中長期スケジュール作成、フィジカルトレーニング指導、栄養指導、道具面のコーチ等、その上でそれぞれの分野についてスペシャリストを巻き込んで強化を行なったほうが良い
- ・JISSのトレーナーや栄養指導、力学検証等全て無料で行なえたことから、もっと定期的に合同練習やレースを行って欲しい
- ・国粋取得選手のみナショナルチームとし他の選手は、JSAF強化選手とする等、徹底した差別化を設ける
- ・世界選手権である条件(例:20位以内など)をクリアできない選手は、ナショナルチームと呼ばれるべきではない。ナショナルチーム選考会は、その条件をクリアした人数が多い時のみ実施
- ・ナショナルチームとしてまとまってレベルアップしていく時期も必要
- ・国内合宿を年2~4回実施し、各選手・コーチ間の交流、協調性、団体行動を学ぶ場を作る
- ・個人の海外遠征だけではなく、ナショナルチームとしての海外大会参加・遠征の実施
- ・個人の力だけではなく、日本チームとしての力を発揮できる組織作り

NT に対する良かった点に対し、悪かった点とあるべき姿に対するコメントが非常に多い結果となった。NT に対するステータス、団結力が希薄していることで各選手/コーチの意見が多く集中したと考える。

また選手においては、厳しい線引き①世界選手権である条件(例:20位以内など)をクリアできない選手②国粋取得選手のみNTに認定等々、差別化を望む声もある。

JOC の専任コーチ制度は、強いリーダーシップを持った人物がナショナルコーチとして活動するシステムであり、JSAF 強化としてスケジュールの消化だけでない、各クラス協会と連携したコーチングスタッフの育成、コーチングテクニックを学ぶ必要がある。

そのためには、選手/コーチがNTに対してステータスが持てる環境整備とJSAFの組織作りおよびスタッフの補充による作業の分担化が必要である。

設問4. 国内強化活動について

(1) 沖縄合宿について

・良かった点を述べて下さい

大方の選手は、温暖な気候で集中したセーリング合宿ができたことでそれなりに満足している回答であった。また合宿でないと実施できない各種目ごとの情報交換ができたと言う意見もあった。

・悪かった点を述べて下さい

- ・場所的な問題として経費が掛かりすぎる
- ・高速インターネットの環境がないこと
- ・リーダーシップを持つコーチが存在しなかったため、結局ほとんど何も共有することがなかった。
- ・方針が大きすぎて(漠然としすぎていて)何をしたかったのか理解不可能。自分の課題をクリアすべく努力はしたが、それに対しての自己評価しかできず相談する相手もいなければ意見を言ってくれる存在もいなかった。
- ・クラスコーチの存在の必要性を感じた。
- ・科学的に効率的に行なってほしい。

悪かった点では、経費の負担(過去2回は、JSAF 負担で3回目は個人負担)が大きな問題であった。また経費を掛けた合宿内容での、中味に対する不満と指導者の必要性が最も多い意見であった。費用対効果として効率的な練習が実施できれば、選手の不満も少なかったのではないかと考える。

・今後の合宿に希望する事を述べて下さい

- ・強化スタッフが3年計画的な強化スケジュールに則ったステップアップの計画性を望みます。
- ・もっと合宿ごとにテーマを決め、日本選手が共通して苦手としている部分を克服してから海外遠征に出していくことを考えるべきです。
- ・合宿そのものに目標設定すること、それが達成できたかを検証すること。次の合宿までに練習してくる課題を与えることが必要です。そのためにはミーティングの時間をもっと充実させることです。
- ・選手をまとめて、あらゆることを共有できる場にすべき。単発で終わるのでなく、もっと長いスパンで計画して、明確に合宿の目的を持つべき。
- ・プライベートコーチとクラスコーチの明確化をする。
- ・海外ではナショナルチーム全員をひとつにまとめる指導者(コーチ)がいて、その指導者が全体を把握し指導すると同時に、選手個人に必要な要素を選手個別に行っている。このような体制が早

急に必要だと思う。

単発的な合宿より数回の継続的な合宿を望む意見が多かった。日本選手は、企業チーム以外で各自の資金調達により活動が成り立っている選手が多いことで、経費削減からも各NTチームが活動する水域を巡回する継続的な合宿を実施する方法も1つあると考える。

また個々が同じ意見を持っていないことから、合宿前に各選手からのヒアリング等を行い、合宿の目的や克服したい課題をまとめておくことも今後必要な作業と考える。
効率の良い強化合宿を年間を通してスケジュールリング、目的を明確にすることが今後の課題である。

（２）その他国内強化活動について

・良かった点を述べて下さい

- ・1艇で練習しているチームが多いので、みんなで集まって、練習での成果や情報交換できたのは良かった。
- ・各チームが海外遠征前にレースを行い調整できたことは良かった
- ・国内で選考レースが増えたことで競争意識が高まった。もっと増やすべきである
- ・国内にいる時期は個々がバラバラで練習もはかどらないなどの問題を解消できた。
- ・数年という単位でもっと計画的に行なえば、もっと効果を出せたと思う。

・悪かった点を述べて下さい

- ・オリンピックが近づくにつれて、国内の強化活動は無いに等しくなった。
- ・海外に出る選手が多かったため、国内での合宿が少なかった。もう少しトレーニングレガッタのような形で練習とレースを合わせたような合宿を行うことが必要。
- ・日本チームとしての共同体制的な意識が出来ていない。オリンピックで活躍するには For the JAPAN が絶対に必要
- ・全てのことが単発的だったこと。選手間で知識や技術面で共有するということが極端に少なかった。
- ・リーダーシップを持って選手をコントロールする人がいなかったこと。
- ・日常の練習が選手個人の判断に任せられていることで、選手に甘えがあった。
- ・オリンピック強化の一部として選手層の少ないクラスに対しての普及事業および対策がなかった
- ・チームごとの毎回の成長の比較、世界との差などナショナルコーチは全部把握していたのか

NTの強化合宿の必要性は、全ての選手が必要と感じている。しかし沖縄合宿の意見と同様にチーム間で共有する合宿の目的等が不明確なことでの連携がなかったと感じる。

またオリンピックまでの計画的な合宿を組むことが必要であり、選手任せからある程度の主導性を、JSAFに求めている意見もあった。

また選手層の少ないクラスがレベルアップする合宿方法等の検討が必要である。

選手のレベルアップを評価するシステムや、短所/長所を把握できる選手管理も今後の課題であり、世界との比較(世界選手権大会等)もしっかり分析する必要がある。

設問 5. コーチ制度について

・成功点を述べて下さい

- ・外部からの客観的な指導、情報収集、伝達を行なうコーチの存在は大きかった。
- ・常に行動をとともにできたので、自分の状態や課題を共有できたこと。海上でのトレーニング時に課題にあわせた練習を効果的にできたこと。レースの時に精神的な支えになったこと。

- ・各選手に対し平等な情報・指導を継続することで、信頼関係を構築できた。オリンピック、アジア大会などの選手が代表になっても選手の癖、特徴を把握しているのでレース前の環境作りができる。
- ・安全面が第一に確保された事。②ビデオ等機材を利用した動作確認、セールシェイプ等の確認等相手が無くても問題が解決された。マーク回航、スタート等の練習も有意義に出来た。

・課題点を述べて下さい

- ・長い間の選手とコーチの関係は、良い関係を持続するのが難しい。プライベートコーチがついていると、他のコーチからのアドバイスをうけづらい。
- ・プライベートコーチとナショナルコーチの関係を明確にする必要がある。
- ・選手にどのようなことを伝え、どのようなことは伝えないべきかを分かっていたいなかったこと。
- ・海外の選手やコーチとの交流がほとんどできなかったこと。ネットワークを構築できなかったこと。
- ・選手への技術的な情報の公平化が難しい。
- ・選手中心の活動にならざるを得ないため、思い切った練習ができにくい場合がある。
- ・公平さを第一に考えなければならず、常に言動に注意しなければならず個々の選手の要望についての調整に苦労した。
- ・専属のコーチを置き、もっと国内合宿、海外遠征を含め長い期間のコーチが必要。

コーチの必要性は、選手の意見から十分理解できた。

しかしプライベートコーチとNTコーチとの情報交換や人間関係がスムーズに行われないと、選手への負荷が大きくなることが理解できる。

またコーチの言動が選手とコーチの人間関係に、大きく影響することを認識する必要があると考える。また個人で活動する選手では、コーチ(人材、コーチフィア)の確保が難しい現状であり、NTコーチの役割が重要であり、プライベートコーチの協力も必要になってくる。

(2) 今後のコーチのあるべき姿

・セーリング競技においてコーチの果たす役割は何かと考えていますか

- ・試合で勝つためにコーチと選手の関係は重要です。まずは選手とコーチはお互いに同じ目的、目標などが共有できているのかが重要(コミュニケーション)
- ・正確な情報を正確に選手に伝えるときともに、選手の創造性を引き出すレベルの高いコーチが必要であり、セーリング競技においても、他のスポーツと同様にコーチの果たす役割は大きい。
- ・メンタル面でも二人のよきアドバイザーとして、精神的な面を強化する。おそらく、すべてができるコーチは殆どいないと思うので、技術・気象・メンタル・医療・健康(食事)、各スペシャリストを集め、個々に指導を行なってほしい。
- ・ナショナルチームの選手はオリンピック強化委員会の管轄の下での強化体制が望ましく思います。我々プライベートコーチはそこに送り込む役割をすることが重要だと考えます。
- ・技術的なことを高めるためには世界のトップチームとの練習をコーディネートできる能力が必要です。
- ・練習から遠征、そして大会においての選手の身の回りの管理。セーリングテクニックの客観的アドバイス。スケジュールリングやフィジカル、メディカル面などでの選手とそれぞれの専門家との連携。
- ・過去の経験だけでは現在の進んでいるセーリングには追いついていけない。まずは指導者が現在のスポーツ、セーリングについて学ぶべきであると思う。
- ・海外の選手やコーチとのネットワークを持ち、積極的に知識やテクニックを入れること。
- ・ウィンドサーフィンの選手は、学連からウィンドを始めた選手が殆どでセーリング競技の基本的な部分での教育は受けて育っているが、道具のことにに関して(各パーツの細かい違いがセーリングにどう影響しているのか)や、気象に関して、またタクティクスやストラテジーに関してのきちんと教えられて育っている選手がほとんどいないことから、こういった知識に関しての部分きちんとコーチできること

が求められている。

- ・情報の提供(海外、他艇、風波、潮、他)。精神状態を含めた環境整備(提供)。スピードアップのための相談役。

- ・練習期: 最終目標の設定。現状レベルの把握→身近な目標設定等。教えるのではなく、考えさせて選手が自分で理解(課題克服させる)。試合期: レースに必要な情報提供。無駄なことを考えさせない、集中させる。

選手/コーチからの意見では、コーチの役割として大きく分けし情報交換、アドバイザー的存在、専門的知識、環境整備、マネジメント能力の記載が多かった。

NT選手のコーチであれば、専門的知識を持った個人でなくスタッフ集団が各分野で科学的な指導に当たることが望ましいと考える。

しかし現状では、スタッフをまとめる組織力の低下、スタッフを雇う資金的な裏づけもないことから、経験的なアドバイスに偏る傾向にあると考える。

世界を相手にするNT選手には、コーチとの人間関係も必要であるか、的確な情報を提供できる能力のあるスタッフ集団をJSAFの内部の人材を活かし構築する必要がある。

設問6. JSAF(オリンピック特別委員会)とクラス協会の関係について

・良かった点を述べて下さい

各クラスともに、多くの意見はなかったが、関係が良好とまではいっていない状況と把握する。今後は、JSAFとクラス協会の情報交換を含め事業に対する意見交換を行う必要があると考える。

・課題点を述べて下さい

●470級

- ・オリンピック最終選考基準の明確化。
- ・コミュニケーションが全くとれていないと言わざるおえない。
- ・470協会とJSAF(オリンピック特別委員会)が協力で出来る人的関係を構築していただきたい
- ・最終選考のこと、世界選手権への派遣チームの選考のこと、最終選考前の計測問題など、幾つかの問題がありました

●ミストラル級

- ・クラス協会に実際の現場を理解している人間がいないこと。クラス協会の中にリーダーシップを持つ人がいないこと。
- ・ウィンドサーフィン協会内部の確立が第一。これはJSAFとの問題というより、WFJ内部の内省を促す。
- ・連盟と協会の連携が思うようにうまくいってないことがあったようだ。
- ・JSAFの一部関係者のなかにはウィンドサーフィンは異端児扱い？

●ヨーロッパ級

- ・もっとナショナルチームをしっかりとめてほしい。統率力ある強化委員長が必要。選手とのコミュニケーションも必要。クラス協会は多分どのオリンピック種目よりも最悪だと思う。

●レーザー級

- ・絶対的な指導力が足りない。お金が無いから完璧に管理することは出来ないというのも分からないわけではないが、オーソリティーとしてもっと権限を主張してもよかったのではないかな
- ・JSAFとしての強化プランを明確にし、継続した強化を実施するとともに、クラス協会へのサポート・補助。各強化活動・大会参加に関し、正確な情報の伝達。

●49er級

- ・JSAFとクラス協会とのコミュニケーション不足。強化方針、課題克服のための動きがみられなかった。

・今後どうあって欲しいかを述べて下さい

各クラスの選手/コーチの意見をまとめると、JSAF、クラス協会間でしっかりコミュニケーションを取り、同じ目標に向かって一致団結して欲しい大方の意見であった。

また選手、コーチ、各チームの意見に流されず強化として強い意志をもって、選手をコントロール下に置くべき等の意見もあった。また公平な情報の公開(選手/コーチ/協会等均等に行う)を求める意見もあった。

オリ特委員会と各クラス協会は、決定事項に関する確認を行うとともに、選手/コーチが不安にならない統一した公示を行わなければならないと認識する。

設問 7. JSAF (オリンピック特別委員会) マネジメントについて

(1) 全体の強化計画

・良かった点を述べて下さい

- ・JSAF (オリンピック特別委員会) が果たした役割として具体的評価できませんが“アテネの海に日の丸を”のスローガンを掲げて意識高揚にはなった
- ・海外遠征時の車のサポートにより遠征が楽になった。
- ・まとめよう、良くしようという意識を感じた。明らかに前回のキャンペーンから改革が起こった。
- ・沖縄合宿や三保合宿などの開催およびヨーロッパ遠征などでのサポート・強化。

・悪かった点を述べて下さい

- ・アテネオリンピックの年に費用がないということではなく、全体の強化を考えて行なって欲しかった。
- ・最終選考に近づくほど資金不足となっていた。全体の計画が見えて来なかった。
- ・選手強化を志向する上においての具体的活動を各選手の専任コーチに頼っていた。
- ・全てが単発的で中長期的なプランがなかったこと。選手をまとめる強いリーダーシップを持った人がいなかったこと。必要のないことにお金を使いすぎていたこと。
- ・選手、プライベートコーチの力量に頼るところが多く、選手とのコミュニケーション不足
- ・手配、情報収集不足により無駄な出費が多かった。派遣・視察による成果が発揮されていない。

クラス別で良かった点の評価が異なるが、大方は合宿の開催(JSAF 負担)、海外遠征のチームカー一等の意見であった。

しかし、悪かった点では、強化の計画性欠如、資金の使用配分の不具合、資金不足等の意見が多かった。また選手とのコミュニケーション不足による各チーム主導の強化になってしまった傾向と考察される。

・今後の計画の立て方について意見を述べて下さい

- ・それぞれのクラスの、毎年の世界選手権における目標を明確に打ち出し、達成したクラスとしないクラスは差別化
- ・年内に今後4年間の強化計画を大まかに作成し、それに伴う費用を計算性
- ・目標とする大会から逆算して、長期計画、年計画、練習目標設定、反復練習、強化練習と普通に計画
- ・オリンピック選手の負担を減らすべき

- ・4年間の強いセーリングチームを作るべく、大胆かつ繊細で綿密な計画をたててほしい
 - ・海外のセーリング現状を理解し、語学力を兼ね備えたスタッフを迎える。
- JSAF(ナショナルチーム)としての活動期間の設定(国内・海外含む)

各チームの活動状況もあるが、JSAFとしての中長期計画を求める意見があり、NT選手の差別化を持つことでの資金活用の幅を広げて欲しい意見も多くあった。

(2) 補助金の仕組み・使途

・良かった点を述べて下さい

補助金は、少なからず選手に配分されたことでのメリットはあると考える。
また上記の通り補助金の差別化により、より上位選手が多く配分を受けられ有効な活動ができると考える。この方法がいつから実施するか？実施のメリット等を検証する必要がある。

・悪かった点を述べて下さい

- ・国を代表して出場する世界選手権大会に関しては、全額補助とすべきと思うが・・・。
- ・補助金が遠征費だけで、支援者に返済しただけでプロジェクトへの補助金とはならなかった
- ・選手に「カラ領収書」を書かせていた。補助の仕組みを説明されていなかった。事前(シーズン前)にどの大会に補助をしてもらえるか等の説明がなかった。よって活動計画が補助を見込んでたてられなかった。
- ・各クラスの強化方法に対してももう少しマネジメントしてもよいのではないか
- ・オリンピック選手に決まってからも自己負担金を支払わねばならないなど、スポンサーなどから獲得したお金に関する使用方法がお粗末だった
- ・国粋獲得チームへ多額の補助金を支給したこと。補助金の使途に制約を設けるべき

多くの意見は、補助金、協賛金の使途に疑問を持っていることが解った。「カラ領収書」の意図はその時の担当者でないと説明ができないが、しっかりと補助金に関する説明を行うことで、選手の理解も必要があると考ええる。

またクラスによってNT数も違うことで、補助金の補助比率を明確にする必要があると考える。
クラス別、選手の世界選手権の成績を基準に、差別化が必要。
世界選手権大会出場選手に全額補助することに関しては、JOC補助金+JSAFの資金援助が可能か等の検証が必要。

・今後の補助金のあり方について意見を述べて下さい

- ・補助金使途の明確化とプライオリティー。最低限でオリンピック内定選手には、いくら補助金を出すのかを明確にする
- ・補助金科目の変更の交渉余地(対JOC等)
- ・主要大会、合宿の使用および合宿や遠征など直接強化になる重点事業に使用
- ・計画的に予算を作って進める。点だけを見ずに、先に繋がる投資的な使い方
- ・必要不可欠なことに後に使えるよう節約も大事
- ・補助金は本当にありがたいが、選手にお金を配るだけが強化費の使い方でない
- ・選手の成績によるランク分け。合宿・海外合宿・指定大会参加を条件としてその度に補助。
- ・ランクの見直しは各年の世界選手権。チームコーチへの経費補助も行い、継続指導を確立する
- ・アテネまでの遠征補助金額(50万円)を低く設定、成績によりプラスアルファを付け成績未達で費用が浮く場合は国内合宿の強化に使用

国庫補助金(JOC、スポ振、toto、スポ振強化事業、他)は、次年度事業計画に伴いJSAFより申

請する。(12月～1月)

また補助金額が決定する時期は、既に事業実施時期と重なる4月以降であることから、正確にいくら補助できるかの判断が難しい状況でもある。

各チームに現状のシステムを正確に理解してもらう努力が必要であり、年度計画とあわせ予算策定が必要である。

また各企業からの協賛金(JSAF)は、アテネ五輪での1億円の使用を含め、しっかりJSAF監査委員の決済を受けるシステムを造る必要があると考える。

同時に、経費科目、経費項目を明確にして資金の流れが解る会計ソフトの管理が必要と考える。

(3) 遠征計画

・良かった点を述べて下さい

遠征計画なんてあったのですか？と逆に問いかける意見が多くあった。

各チームごとの遠征計画が中心であったと認識する。ただし早期にオリンピック選考方針を発表したことで、各自の強化計画を作ることができた意見もあった。

・悪かった点を述べて下さい

JSAFとしての遠征計画がなかったことで、各チームの遠征計画が中心となっていたと認識する。従って遠征先での輸送を含めた資金的な無駄が発生したと考える。

・今後の遠征方法について意見を述べて下さい。

- ・チームごとにまとまる部分はJSAFが調整して、経費を少なくする工夫が必要
- ・遠征に行けるだけいくのではなく、きっちり目標に沿った数のレースに集中して出るようにしたほうが良い
- ・大会の事前調査と、それに対してどの大会にサポートすべきかなどを慎重に検討すべき
- ・選手に選択肢を与えて、その中で選手が選ぶという形
- ・個人単位の遠征ではなく、コーチを含めた各クラス単位の遠征。オリンピックまでの期間を分割し国内強化、海外強化を分け各クラス単位は同一行動
- ・理想としては各クラス毎に遠征した方が、費用的に削減できる。シドニー、アテネとチーム行動が取れない選手もいるので団体行動練習も必要

(4) その他マネジメントについて

・その他マネジメントについて意見を述べて下さい

- ・メールばらつきによる情報の共通性が欠如。メーリングリスト等の整備とJSAFからの情報の発信方法を統一する
- ・競技に集中できるようなシステムを考えてほしい
- ・オリンピック特別委員会の存在と意義は尊厳
- ・日本のセーリング技術の開発発展に従事している技術者を結集できるプロジェクトマネージャーが企画立案し選手を支援していくシステム

マネジメントの業務内容を整理し、全てを統括することができるかを検証する必要がある。

またスタッフの不足により、本来の業務が遂行できなかったと感じる。

オリンピック特別委員会が行わなければならない業務を整理し、業務の責任性を持つことが必要。

8. 艇輸送等の物流について

・良かった点を述べて下さい

ミストラル級のオーバーチャージが大きな課題である。
他種目ではヨーロッパに艇を保管するチームや国内からは、各チームで協力して輸送したことで大きな障害はなかったと感じる。
ただしマネジメントの意味から、輸送に対しJSAFの統合力不足に不満を持っている。

・今後物流をどう進めるべきか述べて下さい

- ・JSAFが中心となり、みんなの遠征計画を吸い上げてとりまとめる
- ・ヨーロッパに JSAF として荷物をおける場所を確保してあげたい
- ・協力した遠征移動体制を考えて準備することが必要
- ・ミストラルもコンテナを使うと助かる
- ・レースの多いヨーロッパや次期オリンピック会場近辺などにみんなが使える倉庫
- ・世界選手権・ヨーロッパ遠征などチームとして行動する強化体制になるのであれば、選手の道具をあらかじめ(ヨットチームと一緒に)コンテナ輸送する方法
- ・輸送関連企業スポンサーの確保。輸送関係マニュアルの作成、選手への通知

多くの選手は、まとまった海外遠征での物流を期待していることが理解できる。
またヨーロッパおよび北京での保管場所の確保も希望している。
上記のことから、マネジメントをJSAFでまとめることでの効率性が高いと考える。

設問9. トヨタサポートによる車両の借用について

多くの選手が有効に活用し、非常に感謝している。今後も大陸輸送に欠かせない一部である。
ただし使用できたチームとできなかったチームがあったが、今後は台数の制限もあることから、NT選手がより効率良く使用できる計画性とシステム作りが必要。

・課題点を述べて下さい

- ・車の種類や配車などを考えれば効率よく使用できる
- ・故障、破損などに対する処置
- ・構造上、後ろの座席のサイドウィンドが外から簡単に開いてしまうことで何件かの盗難が起こった
- ・窓のタイプを変えるなど変更が必要
- ・遠征人数に対する配車方法(3台から6台への要望)
- ・使用方法が悪く借用しているという意識の低さは、日本セーリングチームの印象に直結

設問10. その他意見・希望等何でも自由に記載して下さい。

*アンケートに自由記載された全てを掲載

470 男子

(A氏) セーリング連盟としてヨーロッパに艇庫が欲しい。

国体艇種をオリンピック艇種に変更する。やはり強くするためには底辺の拡大が重要である。企業に属さない人は殆どが県連ベースになる。よって、女子はセーリングスピリッツかシーホッパーSRになってしまう。もし、国体艇種が470とヨーロッパ級であったらどうなのか？多分国体の練習を兼ねて、全日本大会にも出場し、その中からオリンピックを目指したいというチームが少しでも増えると思う。オリンピックを第一と考えるのならば、国体艇種変更が急務だと思います。

(B氏) オリンピックに参加した選手・役員の皆様お疲れ様でした。また、銅メダルを取られました関・轟組、おめでとうございます。次に続く意味でも、彼らの取り組んできた内容こと細かくまとめて頂き、今後の貴重な資料にさせていただきたいと思います。

(C氏) ナショナルチームのマネジメントに関しては、JSAFがもっとしっかりすること。

470女子

(D氏) 早く強化委員会のトップ人事の決定を望みます

- * ボートやセール、マストに関する研究開発に関するアドバイザースタッフがナショナルチームの選手と共同作業を行って日本のセーリング技術の飛躍的な革新がなされるような効果的かつ現実的な人事選任を希望します。具体的にはメーカーからの専門スタッフの協力を取り付けていただきたい。

- * 女子選手の育成強化を全国的な視野で強化委員会が実行していかなければ女子が育っていく環境が日本国内に存在しなくなるように思いますに思います。

(E氏) 沖縄合宿で朝、気象情報を出すことから始めて、選手の気象に対する知識を把握するところから始めました。そして、プレ五輪の時にチームとして気象情報を蓄積しようと提案しましたが、それに対する答えはいただけず、馬場さんがJOCの気象を担当する準備でプレ五輪にくるということになりました。自分達は世界のトップをいくイギリスチームを目標にヨットレースと気象を考えており、イギリスチームの気象から学んだことが大きいです。気象コンサルタントに求めるデータと、現場でその中から必要な情報を選手に加工して出すことは今後しっかりと取り組む分野であります。プレプレ五輪、プレ五輪と積み上げたデータは最終段階でのデータ収集ができませんでしたから、アテネ五輪チームに役立てることができませんでした。プランどおりにデータ収集、まとめの風プランができていたなら、アテネで吹いた北系の風(メルテミ)もある程度制覇できたことと思います。また、チーム全体で情報を効果的に収集し、エリアを理解することに役立てることが出来ます。

北京にむけて、選手にもっとヨットレースに必要な気象を教えていきたいと思っています。選手に基本知識がなければ、いくら気象コンサルタントがデータを用意しても、レース海面との風がつながりません。誰かがたてた予報があたればいいですが、レース海面での風と予報のつながりがわかることがイギリスチームのレベルにあがるステップです。自分達が勉強してきたことを、今度はチーム全体にひろめて、ひろめることができたなら、チーム全体での北京(青島)情報収集ができると思います。こういったプランを聞く耳を持ってほしいと思います。思いつきで張り合うような対抗プランの出し方はやめていかないと、みんなばらばらに勝手に練習する姿勢がかわらないと思います。

{F氏} 人事を変えるつもりがあるのであればお手伝いはいたします。本当に何が必要でどこまでののかをはっきりさせてほしい。有給で動いている人達が現場にいないのには納得できない。(本当に現場の大変さを理解しているのでしょうか)。ユース・ジュニアの強化は実働に即しています。

ミストラル男子

(G氏) 今回の協会活動は非常に選手への負担が大きかった。このレポートを求める事態が今までの協会の実態ではないでしょうか？選手の活動の実態を理解せずに活動していたのではないのでしょうか。施策がはっきりせず、最後には選手の自主性という「言い訳」で逃げたことが多く、協会からの強いリーダーシップ、指導、マネージメントが行われていなかった。資金に関しては、カラ領収書を書かされていたことや、アンダーグラウンドで行なわれていたことがあり、不信感が強かった。また、会長がお話していた「スポンサー各社から頂いた」お金が選手にはた実感が薄かった。例えば、サポートのスタッフが行なっている無駄(協会のコーチボートがあるにもかかわらず運ばずに大会先で高いチャーターをしていた。役員が高い宿に泊まり、選手が安い宿に相部屋で節約していた。ヨーロッパの遠隔地での大会の場合、TOYOTAの車を使わずに現地でレンタカーをしていたこと。等)、節約がされていないと思う。スタッフが英語

が不自由だったと思う。海外との連携が取れていなかった。(情報力不足)情報が選手に届くまでに(海外の選手に比べて)遅く、行動が遅れた。選手強化を(選手個人もしくはチームで行なっていた)受けた実感はない。オリンピックに対する計画性がなかった。(現地手配等は3年前から各国は調査を終了させて、トレーニングハーバーとの契約、合宿用宿泊先の契約を済ませており、オリンピック(2004)に探しているのは日本くらいではなかったのではないかとトレーニング指導等は受けていなかった。選手がレースに集中して戦える環境ではなかった。技術指導、マネージメント、情報等の継承がなされていない。(プライベートチームにはあるが、協会にはない)。強い思い(一緒に戦う雰囲気)が一部スタッフにあった。(「ボランティアでやっているのだからこんなことまでできない」等の言葉を聞いた)、しかし選手は協会に与えられたスタッフと活動を行なわなければならない点も理解して欲しい。選手は負ければその責任は選手が(弱い選手として)受けなければならないが、スタッフにはそのようなリスクもなく切羽つまった緊張感が感じられなかった。

(E氏) 組織編制をしっかりとやるべきだと思う。山田さんがアテネで言っていたように、全体を統括してまとめられるヘッドがいて、その下にしっかりと選手をまとめられるリーダーシップを持った各クラスコーチがいる。さらにそれぞれの現場とタッグを組んでできるスペシャリスト達がいるような構図がしっかり実現できれば、もっともっと全体のレベルアップがしていくと思う。蒲郡など本拠になるところを作って、そこで定期的に練習会を開いたほうが良いと思う。とにかく能力のある人間を適材適所それぞれの位置に配置すること、それに尽きると思う。ユースの育成なども平行して行なうべき。ユース、大学生、ナショナルチームと一貫して進めることが望ましいと思う。特にウィンドサーフィンは外国と比較しても競技人口は圧倒的に多いのにレベルがそこまで上がっていないのは、これが原因だと思う。

(F氏) ナショナルチームでなく、あくまでJSAF強化指定選手の認定。強化選手のランク認定(格差) 国枠取得選手のみナショナルチームの認定(格差) OP代表候補選手のJSAFナショナルチーム認定(格差)

(G氏) 05ナショナルチーム選考についての方針を早急に示してください。

ミストラル女子

(H氏)

☆金銭面に関して。非常にルーズ。あるから使うといった感をうける。自分のお金だったらこだわらう。1ユーロにまったくこだわらずに散在。確かに「ボランティア」でやっていたら、それだけ(1人1部屋)のごほうびがあるべきかもしれないが、もう1ひねりしたら、節約できたお金が最後につけが回っていた。当初2001年から2004年の最後のように緊張財政でやっていたらどんなにかと思う。

☆合宿。三重(津)や三保でやった合宿だが、少なくともボードは「ただでWSF(ウィンド)がやれる機会」として多数に好評だった。底辺を拡大するには機会を与えるだけで充分で、「ただで」は余計だったのではないだろうか。本当に上達したい選手は機会さえあればどんなにでも工面する。

☆精神面。確かに海上では何のサポートも(レース中)得られない。しかし、自立させるのと、つき放す、または放っておくのは違う。細やかな配慮ができない人間がコーチ陣にいれば、選手には競技生活に全く不必要なストレスがかかる。コーチ学が何たるというのも良いが、国体等の「応援する心、またこれに応えようとする心」を見習いたいものだ。

☆フィジカル/オリンピック=運動ということに関して、トレーナーがいない連盟というのは全くお粗末だ。戦術や精神力と共に心技体の体も重要であることを、また作った身体はケアが必要だという必要性の認識がアテネ委員会には低すぎた。(仮にあったとしても、何ら実行していない。)

(I氏) アテネまでの活動でお世話になった役員の皆さんには本当に感謝しています。ありがとうございました。

ヨーロッパ

(J氏) 今後強化を今までのようにチームごと、プライベートにコーチをつけて個別にやっていくの

か。それともナショナルチームでまとまってナショナルチームのコーチをつけてやっていくのか、方針が必要。470以外のクラスは力を入れないとクオリファイも厳しくなると思うので、何か対策を練ってほしい。特に男女シングルハンド。情報の公開！誰かが知っていて、自分は知らないというのは嫌です。特にコーチのいない場合、もしくはコーチが外国人の場合はよくありました。強化のトップの人はもっとチームをまとめられる人に。

レーザー

(K氏) 470女子のメダルは唐津の体制、470男子のメダルは関東自動車工業の体制の成功例であり、JSAF の体制の成功例とは考えにくい。470ばかりに強化が集中しているのではないかと他クラスの選手からは感じずにはいられない。確かに成績を見れば、レーザーなどは強化対象から外れていても仕方がないと感じるが、強くないクラスを見捨てれば、永久に上がれない気がする。「勝てる種目に投資する」というのは正論と感じるが、まったく見捨てないように欲しい。

49er

(L氏) 企業チームは独自のやり方でキャンペーンを組みました。ある時はJSAFを利用し、ある時は独自の考えで動きました。本当はもっともっとJSAFを頼りたかったのです。しかし、何を相談したところで、何も返ってこない状態だと判断し、独自に「前へ」突き進んできたのです。(強化策、活動計画、多方面のスペシャリスト、等など。特定海面のくせ、費用)。そうしなければ、「強くなれない」と判断したのが現実なのです。「強化とは」を再度確認し、JSAF強化の体制、人事、「やり方」を見直す必要を感じています。企業の組織力+JSAFの組織力(アテネはこれがなかった)→北京でメダル増ですよ！

(M氏) 選手の受け皿を多くする必要がある。

その他

(N氏) 各チームからでてくるキャンペーンの進め方の中で、共通する部分が多くあると思います。このようなアンケートは今後の参考となるので良い資料となると考えます。①全体スケジュール②予算面(バックアップのあるチーム、ないチーム)③艇、ギア類の調達④コーチの有無⑤課題等々アンケートの質問も、上記観点からされていますので最終のまとめる作業があれば協力します

総 括

上記の通り皆様からの貴重な意見をもとに、新しい体制で各項目ごとに検証し、重点施策(別紙資料参照)を2004年12月に作成し、プライオリティーの高い項目から優先順位を付け出来る範囲で作業を進めてきました。

1年が経過しまだまだ委員会としての力不足な部分、選手/コーチから不満等があると思います。今後も要望や問題提示等、多く上がると思いますが、選手達とのコミュニケーションを多く持ち、キャンペーンが互いに良い方向で進む努力を惜しまない所存です。

『強いセーリングチームを目指して』選手/コーチ陣の協力と、献身的意見を今後も期待し互いに進歩することを期待します。

(2005年10月19日)